

論文の内容の要旨

論文題目 ニュータウンの夢-アクチュアルな生の様式の社会学的分析-

氏名 秋元健太郎

本論文は、わたしたちが十分に意識することのできない現在を、過去のこれまで意識されなかった側面の認識をとおしてとらえる試みである。具体的にはヴァルター・ベンヤミンが『パサージュ論』で素描した歴史認識論を方法論上の手がかりに、高度経済成長期にあらわれた多摩ニュータウンを分析上の起点にしながら、日清戦争から満州事変を経て今日のグローバル企業に至るまで日本にあらわれた極端なくつかの夢の現在化 (Aktualisierung)を試みたものである。

多摩ニュータウンは、当初、都市に集中した人口の吸収を第一の目的に東京郊外に計画された国家主導の都市開発プロジェクトであった。しかし、70年代からはじまった経済領域からの国家の後退とともに、多摩ニュータウンはあらたな生の様式を都市的なスケールをもった新奇な住空間のかたちで売る経営プランとなった。80年代、首都改造があたらしい夢のイメージに定まると、多摩ニュータウンは改造後の首都の視覚的イメージとして行政やマス・メディアの関心を集めた。80年代後半、多摩ニュータウンは、都心から波及した土地バブルのなか、既存の国家像、宗教像、都市像をつぎつぎに解体しながらその新奇さの程度を高め、昭和の終わった89年に飽和した。多摩ニュータウンは、経済大国を夢見る国民にとって、未来の生活の最新の視覚的イメージを提示する都市であった。

このように多摩ニュータウンは、経済大国化という夢のなかで計画され、70年代の世界的経済変動によって計画の変容を余儀なくされ、80年代の首都改造の夢の膨張とともにそのイメージを膨らませていった。いいかえれば多摩ニュータウンは、同時代の経済のうごきと軌を一にしながら、同時代の願望を最新のかたちで視覚化する都市

であった。こうした経済大国の歩みの同時代的表現という役割を担った多摩ニュータウンは、経済大国の夢の挫折とともに急速に色褪せていった。

しかし多摩ニュータウンは、こうした同時代性の表現とは異なる意味、つまり、わたしたちがまだあまり意識したことのない歴史的意味も同時に持っていた。それは多摩ニュータウンの前後に位置するふたつの集団の夢の橋渡しとしての意味、その媒介としての意味である。このふたつの集団の夢は、資本のイメージを媒介に見出された夢であった。

多摩ニュータウンが媒介する一つめの集団の夢は「東洋の盟主」という夢である。それは国家を同一化の対象とする集団の夢であり、天皇が率いる国家が軍事力によって膨張し世界制覇をするという夢であった。ここで資本のイメージは国家に重ねられていた。「東洋の盟主」という夢は日清・日露戦争後から形成されるふたつの夢を源泉としていた。

第一の源泉となる夢は植民地支配のなかで生まれた。日清戦争の勝利は日本に初の近代植民地台湾をもたらした。台湾民政長官となった内務省衛生官僚出身の後藤新平は、社会ダーウィニズムを思想的根拠にした独自の衛生政策によって、台湾の政治支配と産業化に成功する。それは、衛生を近代性の尺度にした神話をつくることで彼我の地位を転倒し、政治テクノロジーを駆使することでかつての中華帝国の文化を日本の従属下に組み入れる試みであった。日露戦争の勝利で中国東北部の鉄道の租借権を手に入れると、後藤は南満州鉄道株式会社の初代総裁として、台湾でおこなった統治政策を都市改造中心に編成し定式化したもの（「文装的武備」）を実施する。新しい神話を媒介にかつての帝国を自国の植民地にした経験は、近代的なテクノロジーの駆使によって、歴史のなかで培われてきた心性も風景も一新するという夢を形成した。

「東洋の盟主」という夢の第二の源泉は、革命計画のなかで形成された。日清・日露戦争の勝利と帝国主義国への参入は、国内に急激な産業化をもたらし、さまざまな社会問題を引き起こした。そうしたなか、社会主義思想に感化された北一輝は『国体論及び純正社会主義』で天皇ではなく国民を中心とした新国家像を描き始める。北は明治政府の弾圧を受けると中国の辛亥革命に加わり、第一次大戦後、『国家改造案原理大綱』を提示する。それは天皇大権を至上の暴力としてとらえ、その駆動によって大資本を形成し、日本を新国家にするという革命計画であった。この革命計画は、北に感化された青年のテロ行為の結果、天皇中心の国家改造運動として青年将校にひろまり、最終的には陸軍将校石原莞爾の手で世界制覇のための戦争計画となった。北が、社会主義思想と革命の経験をもとに神話的な言説に鍛えあげていった革命計画は、天皇に率いられた国民が暴力と資本の力によって既存の世界秩序を軍事力で一新するという夢を形成したのである。

こうした二つの源泉は、石原の戦争計画を実行した満州事変が結果的に生み出した満州国のなかで浸透し合い、「東洋の盟主」という夢のキャラクターを生んだ。ここに含まれる問題解決のためには暴力の行使をためらわないという態度は、1920年代のデモクラシーの破綻と慢性的な経済不況、国際的孤立のなかにあった国民にとって、あたらしいものに映った。またそこから連想される大アジア主義は、欧米に愛憎半ばする思いを持ち、国内に希望を見いだせなかったエリートにとっては、従来の経済・政

治・文化を一新するという意味であらたな希望として映った。新国家建国に帰着した満州事変は国民をあたらしさの仮象につつまれた「東洋の盟主」になるという集団の夢、具体的には戦線をつぎつぎに拡大する全面戦争に引き込むことになった。満州国、殊にその国都新京は、この集団の夢を、日本国内に先立って都市として可視化する場、改造後の国民の新生活を提示する夢のイメージとなった。

「東洋の盟主」という集団の夢は敗戦とアメリカ軍による占領政策によって挫折する。しかし、天皇の国家を同一化の対象とする願望は消えず、軍事力から経済力への力点の移動を経て、60年代に「経済大国」というあらたな集団の夢となる。多摩ニュータウンは、「東洋の盟主」という集団の夢を都市のかたちで視覚化した新京の役割を、視覚化の対象を「経済大国」に替えて継続する歴史的意味を持っていた。

多摩ニュータウンが媒介するもう一つの夢、「経済大国」の夢に続く集団の夢は、90年代後半にうまれた、まだ名づけようのない夢である。それは国家という共通のものではなく、多様なキャラクターを同一化の対象としており、個人の「価値の高まり」だけを共通のものとする集団の夢である。

このような「価値増殖」を夢みさせるキャラクターは、多摩ニュータウンにビジネス・チャンスのみて進出した企業と、土地バブルの崩壊で国家という同一化の対象を失った顧客のあいだで、情報技術の急速な拡がりのなかでつくられていった。その集団化は、子供向けのキャラクターを大人向けに転倒した「キティ」のブームというかたちではじめて顕在化した。それは、あたらしい成熟のイメージの見いだせない若い女性やN I E S 諸国の若者を、無垢のイメージをつけた商品の際限のない蒐集へと誘うことで、企業が膨張するというかたちをとった。

現在、価値増殖するキャラクターは、それを媒介にしたひとつのビジネス・モデルを構築しつつある。それは顧客がより価値の高いキャラクター商品を、社員がより有能な社員のキャラクターを、そして企業経営者がより優れた経営者というキャラクターを追い求めることで、企業の利益率がおのずと上がり、企業資産が加速度的に膨らんでいくというありかたである。このビジネスのありかたは、顧客、社員、経営者がそれぞれ更新されたキャラクターに同一化するたびにその生が価値増殖の運動に類似し、企業というかたちをとった資本も膨らんでいくというあたらしい集団の夢のかたちである。多摩ニュータウンは、それぞれが別の夢を見ながら、総体として価値増殖を唯一の目的とするあらたな夢の宿り木としての役割を他方で持っていた。

こうした多摩ニュータウンがもつふたつの集団の夢の過渡的形態には、わたしたちが国家を同一化の対象とする夢からようやく覚めると同時に、価値増殖の夢により深くとらわれつつある現在の危機が示されている。しかし現在がこのような危機の瞬間として認識されるとき、多摩ニュータウンに浸透しているいくつかの夢は別の側面を示す。それは挫折した根源的な願望の夢の形成というかたちをとったやり直しの側面である。それは眠りのなかで行われる「夢の作業」と同様、わたしたちの意図に従わず、わたしたちに刻まれた経験の衝撃、すなわち歴史が強いるものである。

こうした側面から多摩ニュータウンに浸透した夢を見ると、たとえば「東洋の盟主」というキャラクターには西洋諸国の主導で行われてきたグローバリズムを平等にやり直すという願望が、他方の「資本」に類似するキャラクターには個人が国家と同

一化することなく生の様式化をやり直すという願望がおぼろげに見出される。もちろん、こうした根源的願望は、これまで「資本」に媒介されて見出された神話と浸透しあったかたちでのみあらわれてきたし、今後も純粹なかたちであらわれることはない。しかし、こうした夢はわたしたちがそれぞれ生の様式として選ぶ「資本」との距離に応じて、古びた神話としても、アクチュアルな課題としても現れるものである。

多摩ニュータウンを媒介に見出される夢は、現在の危機の認識とのかかわりにおいてとらえるとき、わたしたちを終わりのない神話のなかに拘束する運命の徴ではなく、わたしたちのまなざしを過去へひらき、わたしたちの現在の位置や課題を浮かび上がらせるメディアとなりうる。この意味でニュータウンは、圧縮された過去の夢を解読すべき都市だといえよう。